福岡大学図書館
Fukuoka University Library

2025年度
教員おすすめの本

もみじをクリックすると
図書の詳細画面が開きます。

人文学部

何 憶鴿先生

傾城の恋；封鎖
張愛玲著；藤井省三訳

日本占領下の上海に彗星のごとく登場し、今でも中華圏で広く愛読され続けている作家張愛玲（1920-1995）の小説集です。本書に収録されている代表作の 傾城の恋」は太平洋戦争開戦直前の香港を舞台とした作品です。離婚後没落した実家に戻ったお嬢様 白流蘇と英国育ちでプレイボーイの青年実業家 范柳原の恋の駆け引きを描いたラブロマンスです。
香港陥落の瞬間二人が結ばれため「傾城の恋」というタイトルがつけられました。
80 年以上前に書かれた小説ですが、全く色褪せていません。登場人物の内面も言動も普遍的で共感しやすいと思います。世紀末文学っぽいゴージャスで退廃的な雰囲気もとても魅力的です。過去の人々の恋愛模様を覗いてみませんか。

新しい声を聞くぼくたち
河野真太郎著

ジェンダー問題と文芸批評に関心を持つ学生に強くおすすめしたい一冊です。前著『戦う姫、働く少女』では、著者は アナと雪の女王』や 千と千尋の神隠し』などの作品に登場する女性キャラクターを通して、新自由主義、ポストフェミニズムの状況下における女性と労働にまつわる問題を分析しました。本書でも新自由主義とポストフェミニズムがキーワードになっています。ただ、焦点は男性に当てられています。主題は、著者の言葉を借りれば ポストフェミニズム状況における男性性」です。著者は『怪獣8号』、『BEASTARS』、『ジョーカー』などの作品に登場する男性キャラクターを丁寧に分析することを通して、男性はどのようにフェミニズムに向き合うべきか、この時代をどのように生きるべきかといった問題について議論しています。本書を読むことによって、ジェンダー問題に対する理解が深まるでしょう。また、文芸批評の面白さもわかるはずです。

中華オタク用語辞典
はちこ著

E-book

日本と同じように中国でも推し活ブームが盛り上がっています。中国の推し活はどのようなものなのでしょうか？結論から言いますと、中国の推し活文化は日本に深い影響を受けつつも、独自の形で発展してきました。今回おすすめする『中華オタク用語辞典』を読めばそれがよく分かります。本書の著者は推し活の当事者でありながら、言語学や社会学の専門知識も豊富です。そのため、この本からは中国の推し活の様子だけではなく、中国の政治や社会の実態も覗けます。また、辞書の形を取りながらも堅苦しくなく、ポップに見えて実は奥が深く、まるで日中の文化交流の現場からの生中継のような、とてもバランスがいい本だと思います。もちろん中国語の勉強にもなります。ぜひめくってみてください。

人文学部

森 丈夫先生

インカとスペイン帝国の交錯
網野徹哉［著］

近年、歴史学では、「グローバルヒストリー」という方法が重視されていますが、本書は、その面白さや可能性を存分に体現した本です。例えば「グローバルヒストリー」が意識されるようになってから、歴史学者は従来世界史を主導してきたとされるヨーロッパや東アジアだけでなく、世界各地の遊牧民や先住民に目を向け、その歴史的発展や社会システムを描くようになりました。本書はそれをインカ帝国で実践し、生き生きと――残酷な面も含め――その生成過程を描きます。そして本書の「グローバルヒストリー」実践の白眉は、そのインカ帝国がスペイン帝国という、これまた複雑なプロセスを経て形成されたヨーロッパの帝国との邂逅として新世界の征服を描いている点にあります。本書の魅力はその流麗な文章にもあり、読み始めたら止まらないこと間違いないです。

磯田 則彦先生

移民大国化する韓国
春木育美, 吉田美智子著

今年の2月下旬、韓国統計庁が 2024 年の合計特殊出生率と出生数を発表しました。前者は 0.75（暫定値）。一昨年の同国史上最低の値からわずかに上昇したものの、引き続き「超少子社会」の現状を示しているといえます。長時間労働などによる子育てと仕事の両立の難しさ、子育てにおける女性への負担の偏り、首都圏への人口の一極集中による住宅・子育てコストの増大やライフスタイルの問題などが影響しているようです。「え？」どこかで聞いたような・・・。高度な少子高齢社会化や人口減少、日本も同様の問題を抱えています。本書には、外国人に関する韓国社会の2000年代以降の政策や近況が詳細にまとめられています。著者のお一人は韓国への留学経験もある国際派の社会学者、もうお一人は同じく国際経験豊かなジャーナリスト。異なる視点から同国社会を鋭く考察しています。本書の内容は、「隣国の現状と近未来」を映し出したものにとどまりません。中国やシンガポールなども含めた（厳密ではありませんが）「東アジア」の現状と近未来に通じています。身近なアジアの現状を理解されたい方、日本の近未来を真剣に考えたい方に適した書籍です

人文学部

入江 誠剛先生

子どもの貧困・不利・困難を越える学校
柏木智子，仲田康一編著

「困難な状況にある子どもたちに、学校は学校として何ができるのか。そして、行政・地域とはどう連携を図ればよいのか」。本書では具体的な実践を紹介しながら、その方途を示す。福岡県の事例は、推薦者が、校長として最後の 3 年間を勤務した福岡市立堅粕小学校での実践である。同和関係校として未だに偏見の目で見られる同校であるが、子どもたちは様々な困難を乗り越えながら日々学校生活を送っている。本書は、どのような環境に置かれていても教員をはじめ、周囲の大人の関わり方次第で子どもたちは、自らの可能性を発揮してたくましく育つということを証明した一冊である。

川島 浩一郎先生

科学哲学
ドミニック・ルクール著
沢崎壮宏，竹中利彦，三宅岳史訳

研究活動と「科学」の関係をどう捉えるかについては、潜在的に、様々な論点があります。たとえば、どのような条件をみたせば、研究を「科学」と呼ぶことができるのでしょう。「科学」は事実の記述なのでしょうか、あるいはモデルの構築なのでしょうか。また研究は、そのすべてが「科学」でなければならないのでしょうか。

本書では、科学思想史の概説を通して、研究と科学の関係について考えるための手がかりが、非常にコンパクトに紹介されています。ややコンパクトすぎるきらいはあるものの、科学思想の歴史を手軽に概観することで、「科学」概念に多様性があることをよりよく実感できると思います。英米系の科学哲学に偏らず、ガストン・バシュラールやジョルジュ・カンギレムなど、フランスにおける認識論に多く言及していることも、本書の特徴になっています。

とくに学部の1年次生や2年次生に、お薦めしたい文献です。ゼミや研究室で具体的な研究活動に携わるようになると、研究という枠組みを客観的かつ抽象的に考察する時間的な（あるいは、ココロの）余裕は、なくなりがちになるらしいです。

人文学部

渡部 智也先生

三つの棺
ジョン・ディクスン・カー著；
加賀山卓朗訳

ロンドンの町に静かに雪が降り積もる夜、グリモー教授のもとを、コートと冒子に身を包み、仮面をつけた長身の謎の男が訪れた。やがて二人が入った書斎から、銃声が響く。居合わせたフェル博士たちがドアを破ると、絨毯の上には胸を撃たれて瀕死の教授が倒れていた！しかも密室状態の部屋から謎の男の姿は完全に消え失せていたのだ！名高い“密室講義”を含み、数ある密室ミステリの中でも最高峰と評される不朽の名作。

モルグ街の殺人；黄金虫
エドガー・アラン・ポー［著］；
巽孝之訳

世界で最初の探偵小説はなんでしょうか？この問いに対し、多くの批評家の意見は一致しています。すなわち、1841 年にアメリカの作家エドガー・アラン・ポーによって世に出された短編「モルグ街の殺人」です。この作品は、「探偵」、「探偵の友人」、「推理による解決」、という、およそ現代の多くの読者が探偵小説に不可欠のものと考える要素を兼ね備え、まさに探偵小説の祖の名にふさわしいものとなっています。
この作品について非常に有名なことは、「〇〇による殺人」を扱っている、という点です（取り返しのつかないほど大きなネタバレになるため、ここでは伏せておきます）。確かにこれは一度知ると忘れられないほどのインパクトがある要素でしょう。しかし本作について、もう一つ見逃せないことがあります。それは、この作品が世界初の探偵小説であると同時に「世界初の本格的密室殺人事件を扱った小説」でもある、ということです。実際、ミステリ作家として知られるエラリー・クイーンはエッセイの中で、本作が考案したものの 1 つとして、「密閉された部屋のモチーフ」を挙げています。
「密室」は英語では Locked-room Mystery と表現され、文字通り「鍵のかかった部屋で事件が起こる」物語であり、今なお多くのミステリファンの心を惹きつけるジャンルです。「探偵小説」と「密室」の長い歴史を同時に堪能できる本作は、是非学生のうちに読んでほしい作品です。また、この本には他のポーの短編、それも探偵小説的要素のふんだんに盛り込まれたものが複数収められており、「探偵小説の父」の異名を持つポーという作家を味わう上でも、重要な一冊と言えるでしょう。

人文学部

古川 善也先生

文化進化論
アレックス・メスーディ著；
野中香方子訳

「文化」と「進化」は一見関係のないもののであるように思えるが，特にヒトにおいて両者は相互に重要な役割を担っている。文化の変化を生物の変化である進化との類似性から検討する立場が文化進化論であり，文化進化に関する第一人者であるアレックス・ メスーディ博士が書かれたのが本書『文化進化論：ダーウィン進化論は文化を説明できるか』（2016年，NTT出版）である。本書は全10章の構成となっており，その中で生物進化の基礎となる自然淘汰のアナロジーの視点で，ミクロな文化の変化（例えば，かつては様々な用途のために開発された多用な形のフォークが現在の形に集約された事例）からマクロな文化の変化（例えば，帝国の盛衰のプロセス）までを捉えている。また，実験を用いて文化の伝達プロセスについて解き明かす研究も取り上げられている。文化進化というあまり馴染みのない分野かもしれないが，入門書としておすすめの一冊である。

法学部

山下 慎一先生

社会保障のどこが問題か
山下慎一著

こんにちは、著者本人です。自画自賛しておきますが、この本はとても面白いですよ! ミステリー小説のように読める新書を書こうと志しましたが、成功しているかどうか、是非皆さんに評価してほしいです。

図録法学入門
堀口悟郎, 斎藤一久編；麻生典［ほか］著

この本は、「法学入門の教科書ではなく、資料集として使えるように」というコンセプトで作られています。図表や写真がとても豊富で、寝転びながら見るだけでもためになると思います。私も著者の一人として加わっています。

スモールワールズ
一穂ミチ著

ネタバレが危険なので詳細は伏せますが、私としては、この短編集に収録されているうちの1編が、どのホラー小説よりもホラーだと思いました。衝撃的で、本当に怖かったです。

立憲主義と民主主義
阪口正二郎著

私自身が法学部の4年生だったころ、ゼミの先生から紹介してもらって読んだ本です。ちょっと難しいですが、非常にスリリングな議論が展開されていてとても面白く、私自身の法学研究の1つのバックボーンになっている本です。民主主義とか憲法とかに興味がある学生さんは、是非、チャレンジしてみてください!

まだ、法学を知らない君へ
東京大学法学部「現代と法」委員会編

東京大学の1・2年生（文系・理系問わず）に向けた授業の内容がベースになっている本らしいです。色々な法律が紹介されています。たとえば労働法なら、「非正規格差をなくすには」といったように、現代の社会問題をトピックにしてその法分野を紹介する書き方がされており、読みやすいのではないかと思います。福大法学部生のみなさんはもちろん、他学部の学生さんたちにもぜひ読んでほしいと思います。

経済学部

山崎 好裕先生

永遠の平和のために
イマヌエル・カント［著］；
丘沢静也訳

ロシアのウクライナ侵攻が始まって3年になる。21世紀にこのような戦争が本当に起きてしまったことに衝撃を受けた私は、それ以降ドイツの哲学者イマヌエル・カントの永久平和論を読み返すことが多くなった。フランス革命政府とプロイセン、スペインとの戦争を終結させたバーゼルの和約にカントが不満を感じて書いたのがこの論考である。だから、この本は直接ロシアとは関係ないのだが、カントが生涯を過ごしたケーニヒスベルクが今カリーニングラードと名を代えて現在ロシアの飛び地となっていることは何かの因縁と言えよう。この本のタイトルと裏腹に、カントは平和を自然な状態であるとは考えない。むしろ、自然なのは戦争の状態であるというのがカントの見立てだ。ただ、戦争と言っても現実に命を取り合う交戦状態にある状況だけではなく敵対行為の可能性が常にある状態を含めてのものだ。そうした敵対行為の脅威が全くない平和は空想的であって我々人類には望むべくもない。だから、我々にできることは和約や国際法によって敵対行為が交戦として顕在化しないように制御することだけである。だが、10代のころからカントの著作に慣れ親しんできた私のような人間にとって、こうしたカントの考えはショッキングなものだ。なぜなら、あれだけ人間の理性を研究したカントが、敵対行為を常に考える点で人間は邪悪であると言っていることに他ならないからである。カントが永久平和論を書いたのは71歳のときだから、それ以前とすっかり考えが変わってしまったのであろうか。違うと思う。カントは理性を持つ人間が邪悪となり得ると言っているのだ。だからこそ、他人や他の国を必ず目的として扱い手段として扱わないように、という道徳律が規範として必要になる。同書のなかでカントは、共和制と民主制が異なるという私と同じ主張をしている。日本は民主主義だという言い方があるが、たぶん共和主義というのが正しいと思う。責任ある代議士が政治を行う共和制と異なり、選挙によって選ばれた行政が暴走するとアメリカのトランプ政権のようになるからだ。カントの言葉では、民主制の形態は言葉を厳密に理解する限り必然的に独裁主義なのである。

経済学部

山崎 好裕先生

ダーウィン自伝
チャールズ・ダーウィン著；
八杉龍一，江上生子訳

ダーウィンの進化論を知らない人はいない。しかし、ダーウィンが進化論をどのように提起したかを正しく理解している人は極めて少ないだろう。翻訳であっても『種の起源』を直接読んだことがある人はほとんどいないはずだ。ただ、ダーウィンの進化論を本当の意味で知るためには、私は『ダーウィン自伝』を読むことをお勧めする。ダーウィンは大学教授になったことがないし研究によってお金を得て生活していたわけでもない。研究で食べている人をプロと呼ぶなら、ダーウィンはアマチュア研究者なのである。幸いダーウィンには食べるには困らない十分な財産があった。NHK朝ドラの主人公となった牧野富太郎もアマチュアであった点でよく似ているかもしれない。牧野は全国の支援者の協力を得ながら植物標本を精力的に収集して植物図鑑を完成させたが、ダーウィンの真骨頂もまた珊瑚、蚯蚓、蔓脚類などの個別生物に関する地道な研究にある。進化論の着想の根源に、私が専門とする経済学があるという話を皆さんは知っているだろうか。ダーウィンは1837年10月という日付まで入れて、たまたま楽しみのために読んだ古典派経済学者マルサスの『人口論』から自分の生物研究のために頼りになる理論を得たと書いている。だが、これを真に受けるわけにはいかない。と言うのも、ダーウィンが『種の起源』の草稿を書いているときにマレーシアのウォレスが進化論を綴った論文を送ってきていていわゆる先取権を巡る争いが起こりかけている背景があったからだ。ウォレスは自分がダーウィンより後に『人口論』を読んだとしてこの問題は決着することになる。明治の日本でも流行った社会ダーウィニズムを提唱したスペンサーに会ったときの印象をダーウィンは、極度に独りよがりで好きにはなれないと語っている。そして、スペンサーが言っていることは自分の研究に何の役にも立たないと感じていた。つまり、自然淘汰を適者生存と言い換えて社会に適用することは、ダーウィンにとって有難迷惑以上に有害なものと感じられていたようなのだ。スペンサーの議論がナチスなどによって悪用されていったことを考えれば、ダーウィンの直感は真に正しいものだったわけである。

経済学部

山崎 好裕先生

水
古井由吉著

皆んなも知っているように私は経済学者である。しかし、幼いころから小説を書くことに憧れてきた。結果、現在、大学教授の傍ら新聞朝刊に歴史小説を連載している。私が小説家としての文体を学んだのは、十代のころよく読んだ志賀直哉や梶井基次郎からであった。しかし、東大生時代に最も好んで読んだのは同時代の作家・古井由吉である。残念ながら古井も2年ほど前に故人となった。学生の皆んなが小説を読むことはめっきり少なくなったのではないだろうか。だが、気に入った文体の小説家に巡り会ったら系統的に読んでみることをお勧めする。『水』は古井の短編集である。冒頭の作品「影」はだいたい次のような話だ。「私」はマンションの7階に住んでいる。親からの遺伝で咳き込むことが多く完全な健康体とも言えないのだが、ベランダで煙草を吸うことも多い。そのとき、向かいの棟の壁に住人や道行く人の影が大きく映ることがあって「私」はいろいろな思いに捉われながらそれを見詰めている。そして、「私」は、車に後ろ脚を轢かれた子犬の姿やナマケモノが大蛇に飲み込まれる想像、かつて同僚だった年上の教授K先生がホテルで自死した記憶などから死と生の境界が曖昧になっていくことを感じる。古井の多くの作品で、病気と健康、生と死の明確な区別が宙吊りにされて境目がボンヤリしていくことがある。社会学者イヴァン・イリイチは脱病院化社会に警鐘を鳴らした。イリイチが指摘するのは、病気の社会管理によって人々の自律性が失われる危険性である。半健康状態の人に病名が与えられ、病人として管理の対象となることを、イリイチは医療が原因となって発生する病気、「医原病」と名付けた。病人のスティグマが押されることでその人は社会からある意味隔離されてしまう。一種の差別とすら言えるわけである。フランス現代思想を代表する一人ミシェル・フーコーは、医療が無際限に私たちの私生活に介入するようになったことに問題を見出した。学校や職場での健康診断では全員が健康と病気に選別されてしまうのである。フーコーは国家が健康の平等を医療保険で補償しているように振舞うことで所得の不平等を隠蔽していると考えたのだ。

経済学部

武井 敬亮先生

きみのお金は誰のため
田内学著

ギリシャ神話に登場するミダス王は、黄金を求めるあまり、触れたものすべてを黄金に変える力を神から授かりました。しかし、この力が彼に幸せをもたらしたかというと、そうではありません。空腹を満たそうと食べ物に手を触れると、その食べ物は黄金に変わり、結局、空腹を満たすことができなかったのです。この話は、いくら黄金をたくさん持っていても、それによって幸福を手に入れることはできない、という教訓を教えてくれます。
この本でも、同じように「お金」についての興味深いテーマが取り上げられています。具体的には、『お金自体には価値がないこと』、『お金で解決できない問題があること』、さらには『みんなでお金を貯めても意味がないこと』などが挙げられています。一見するとこれらの主張は常識に反しているように思えるかもしれませんが、この本を読み進めると、実は私たちが普段信じている常識そのものが問い直されることに気づかされます。
これから経済学を学ぶ学生にとっては、新しい視点を得られる貴重な一冊になるでしょう。また、なぜ経済学を学ぶ必要があるのか、その理由を深く考えるきっかけにもなるのではないでしょうか。

森田 薫夫先生

財政のエッセンス
西村幸浩，宮崎智視著

【財政問題を理解するための一冊】
「103万円の壁」や「財政赤字」といった言葉をテレビや新聞でしばしば見かけます。これらの言葉の意味を問われたとすると、皆さんはどうするでしょうか。インターネットによる簡易な説明を検索することも時には必要でしょう。ただ、本書を読み、それらの用語の背景や社会に及ぼしうる影響、それらの現状を包括的に理解することも、ぜひ試してみていただきたいと思います。

商学部

飯塚 雄基先生

会計の世界史
田中靖浩著

【簿記・会計に親しみを持って勉強しよう】
大学で初めて簿記・会計に触れる人も少なくないだろう。
そんな人が最初に思うことは、なんてわかりにくい科目なんだろう、ということではないだろうか。
たしかに簿記・会計はあまり深いことを考えずに規則にしたがって企業の取引を処理すれば問題が解けたりするので、わかりにくくても問題が解ければそれでよい、と割り切っている人もいるだろう。
しかし、取引が複雑になり、処理する方法も多岐にわたると、より深く考えないと対処できないという状況になってくる。
そうすると、勉強意欲を失い、簿記・会計の勉強からは身を引こうというのがお決まりのパターンである。
しかし、これは大変もったいない。せっかく勉強し始めたのだから、簿記・会計に親しみを持ってもらいたいというのが教員の願いである。ではどうしたら、そのような親しみを持てるであろうか。
答えは一つではないが、オススメは歴史を学ぶことである。
「簿記・会計はどこで、何のために生まれたのか」
「簿記・会計はどのようにして発達したのか」
「たとえばどんな人が簿記・会計の発達に貢献したのか」
「簿記・会計は国の経済とどのように結びつくのか」
このような問題を具体的なエピソードを交えてわかりやすく教えてくれるのが本書である。
具体的な章立て等々は割愛するが、ぜひ最初の数ページだけでも読んでほしい。
本書はすでに簿記・会計を学んだことのある読者はもとより、これから簿記・会計を学ぼうとする読者にとってもわかりやすい本である。
簿記・会計を勉強する必要性を感じつつも、二の足を踏んでいる人、すでに勉強しているがなかなか意欲がわかない人、
なんとなくわからない、という漠然とした苦手意識を抱えている人、このような、まだ簿記・会計に親しみを持てていない人にぜひ読んでほしい一書である。

商学部

岡 陽子先生

パトリックと本を読む
ミシェル・クオ著；神田由布子訳

「本はカッコつけないから好き。」作者が本文でパトリックに語る言葉である。
台湾移民2世としての視点で見つめるアメリカ社会の光と影。アメリカが舞台ではあるけれど、いつの時代も若者が直面する様々な難問もパトリックとの交流を通して次々と語られる。ともすれば内容が散漫でまとまりに欠ける内容になりがちなところを、Ms. クオ(作者)が素直に「カッコつけず」に自分の内面の声を読者に届ける手法は見事である。
エリートにとってはなくてはならない、しかし表向き存在しないはずの社会階層。無知でいた方が穏やかな生活が送れると知りながら、そのパンドラの箱を開けることを是とする教師としての独り善がり。無邪気さゆえの残虐性。そして「正義」を「粋」に感じる「若さ」故の世間への反発。世界を変えることはできないかもしれないという絶望と、そもそも世界を変えられるかもしれないと思っても許される階層にいる自分との鬩ぎ合い。
作者がさまざまな社会問題と自分の人生の交差点を探りながらパトリックと対峙していく様子は、毎日大学生活を真剣に送りながらも将来のことを不安に思っている皆さんはきっと共感できるはず。日本語の帯がもう少し内容をうまく伝えることができていれば、日本でもベストセラーになっていたのではないか、むしろ中学校高校あたりの推薦図書でもいいのでは?と勝手なことを思いながら、現役学生さんだけでなく、以前は純粋に、誰かの都合で成り立っていそうな世間のことを憂いていたはずの昔「若者」、今「カッコつけてる大人」にもお勧めの1冊。

商学部

笹川 洋平先生

論理トレーニング101題
野矢茂樹著

本書は101の例題を解きながら文章を論理的に読むために心がけるべき事柄を解説するノウハウ本です。この本を薦める理由は、例題を取り組む過程で最初の見解を撤回し解答を変更するなど読者と同じ目線で例題に取り組んでくれるのでノウハウ本にありがちな説教臭さがなく、前向きな気持ちで読み進めることができと思うからです。例題は評論の一部で雑学的知識を増やしてくれる楽しさがある。巻末に掲載されている例題の出所リストから元資料を読むこともできる。簡単に内容を紹介すると、文章の「接続詞」に注目すること、なければ接続詞を補いながら読むと論旨が明快になるという。続く章では「議論の骨格をつかむ」、「論証とは何か」、「演繹の正しさ・推測の適切さ」、「論証の分析ツールとしての質問の組み立て方」に関する例題が紹介されます。最後に著者からの注意を紹介します。「現代の日本社会ではこの本で身につけたことを軽々に振りかざさずと友達関係や家族関係を損ねる恐れある。だから論理の刃は研ぎ澄ましここぞというときに抜くべきものである」と。